

小学校教育におけるムーブメント

1. 北海道ムーブメント教育研究会の歩みと小学校教育

我が国でムーブメント教育が始められたのは、今からちょうど 40 年前(1983 年)のことです。当時光塩女子短期大学で教鞭を執られていた大坂克之先生と札幌市教育委員会の石川正美先生らが中心となって理論的、実践的な研究が始められ、北海道ムーブメント教育研究会ができあがりました。

その研究は非常にユニークで、対象が幼児教育、小学校教育、特別支援教育と、複数の校種にまたがっていました。その後、特別支援教育を主な研究対象とする小林芳文先生(横浜国立大学)が展開する同名の研究「ムーブメント教育」と区別するため、大坂先生は自ら展開する研究を「ミュージック・ムーブメント」と名称を定めました。

「ミュージック・ムーブメント」という名称をみておわかりのとおり、本研究は音楽を切り口に進められました。今、「切り口に」と書きました。つまり、このミュージック・ムーブメントの研究で育てたいのは、単に、優れた高度の音楽の知識や技能を持ち合わせる子どもではなかったのです。もちろん音楽の知識の修得や技能の伸長は期待するところです。しかし、それはあくまでも結果としての姿です。もっとも大切にしたいのは、「その過程」にあると考えていたのです。そのスタンスは、発足から 30 年経った今でも何ら変わっていません。

では、「その過程」って何だ？ どんな子どもを育てたいのか？ ということになります。それは後に述べることにします。

さて、小学校教育におけるムーブメントについてフォーカスしてみます。「音楽を切り口」にした研究ですから、当然「音楽科」という教科の中でムーブメント教育の研究が行われました。研究会発足当時は、ムーブメントの大きな特徴の一つである「体の動き」を音楽の授業に取り入れた新奇性もあって、多くの小学校の先生に注目されました。また研究の目指す方向性も肯定的に受け入れられたと思われまます。そのことは、当時の研究大会に集まった参加者数を見ても納得のいくところです。

ところが、年を重ねるうちに、先生たちのあいだでムーブメント熱が冷めていくことになります。やはり研究大会の参加者数にそれは現れていました。いったいその原因はどこにあったのでしょうか。私見の域を超えませんが、私なりの考えを述べたいと思います。

小学校における音楽科の授業は、つまり教科としての音楽です。何を言いたいのかというと、音楽科には学習指導要領に定められた目標があり、内容があるのです。もっと言うと、その内容は「〇〇ができる」「〇〇がわかる」というような教育の「結果」を求めています。でも、先述したようにムーブメントでは「過程」を大切にしています。そこにズレを感じる先生方が増えたのだと思います。「ムーブメントをやったら、何ができるようになるのか?」「ムーブメントのカリキュラム、系統はどうなっているのか?」という疑問が浮上したのです。そしてときには、「ムーブメントの授業は、子どもが動いて楽しそうだけど、音楽を学んでいないのではないか?」「活動あって学びなし?」「遊んでいるだけ?」という批判をも受けるようになったのです。

研究会のメンバーは、その疑問や批判に応えるべく、理論や実践の研究を進めましたが、なかなかその成果は広く普及するには至っていないのが現状かもしれません。しかしながら、本会北海道ムーブメント教育研究会が40年もの間脈々と続けられてきたことには大きな意味と価値があると思っています。何せ40年も続いているのですから。

30年の節目を迎えた今、私たちは、再び小学校教育におけるムーブメントの価値や可能性について整理したいと思います。

2. 「動くこと」の意味について

「結果ではなく、過程を大切にすると」書きました。では、その過程とは何か？ その過程で何を育てたいのか？ という疑問はよく聞かれることです。また「どうして体を動かすのか？」あるいは「どうしても体を動かさないといけないのか？」ということもよく言われます。ここの辺りを整理してみたいと思います。

◆「なぜ動くのか？」

ここで2つの理論を取り上げたいと思います。ひとつは、大坂先生の「からだまるごと論」を紹介します。もうひとつは心理学者の河合隼雄先生の論です。

まず、大坂先生の「からだまるごと論」。大坂先生は「からだ」というようにひらがなを使います。それには訳があります。低年齢の子ども「からだ」にはいろいろなものが含まれているということです。

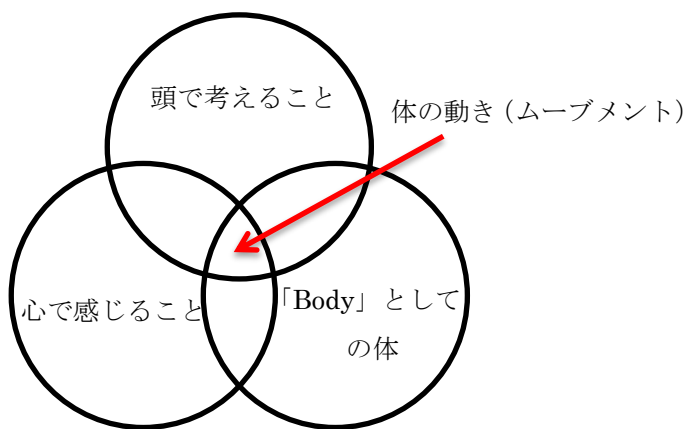


図1 大坂克之の論

飛び跳ねることでしょう。また逆に面白くないことがあったら、地団駄を踏んで真っ赤な顔をして泣き叫ぶことは容易に想像がつきます。

一方、これが大人だったらどうでしょう。嬉しいことがあっても、怒りを覚えることがあっても、顔の表情や体の動きに表すことなく、ポーカーフェイスを保つこともできるはず。つまり、年齢が低ければ低いほど、頭で考えること、心で感じること、そして身体が一体になっているのです。上の図で言うと、3つの円が非常に近い位置にある、交わりが大きくなっている、それが子どもの「からだ」です。

ところが、だんだん年齢が上がるに連れて、3つの円が次第に離れていく、つまり「分化」していくのです。だから大人はポーカーフェイスを装うことができると考えられるのです。

ここで1つの論理が生まれます。子どもの「考える力」「感じる力」そしてそれらを支え

左の図を見てください。子どもの「からだ」には、「頭」「心」「身体」がごっちゃになって存在しているというのです。

一つの例を挙げます。3歳くらいの子どもをイメージしてください。何かとても嬉しいことがあったとします。その子はどうしますか？ 嬉しいという気持ちを体いっぱい表現しますよね。キャッキヤと声を挙げながら、

る「身体」、これら3つをバランスよく育てるためには、子どもの「からだ」を動かすことが有効だという論理です。つまり、ムーブメント教育が目指すのは、「考える力」「感じる力」それを支える「身体」をバランスよく育てることと言えます。これが、ムーブメント教育の目的であり、先述した「過程」なのです。自らの力で考え、自らの感性を耕し、自らの体を自らのものとする、それらがムーブメントで大切にしたいことなのです。その目的を果たすための有効な方法が、3つの円の交わる部分（体を動かすこと・ムーブメント）であるという論理が成り立つわけです。

◆「わかる」には2通りある

次に河合隼雄先生の理論をご紹介します。学習についての理論です。河合先生は、「ものごとがわかるというとき、2通りの世界がある」と述べています。ひとつは、「頭で考えてわかる世界」、そしてもうひとつは「心や体で感じてわかる世界」だと言います。

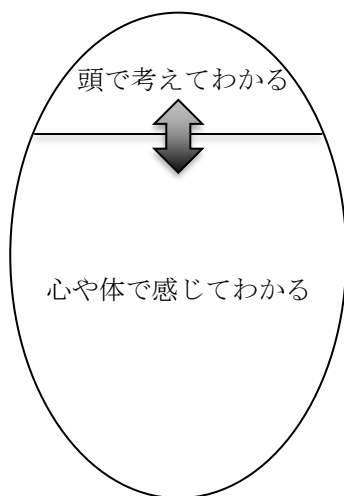


図2 河合隼雄の論

左の図を見てください。「頭で考えてわかる世界」よりも「心や体で感じてわかる世界」の面積の方が広いですね。河合先生は、ものごとが本当の意味でわかるっていうのは、「心や体で感じてわかる世界」のほうが多い、大事なのではないか、と言うのです。もちろん、「頭で考えてわかる」ことも大事です。もっともいいのは、図中の上の世界と下の世界を行ったり来たりしてわかっていくことが望ましいと言います。

例を挙げます。例えば、だんだん速さを増していく音楽があるとします。音楽用語ではアッチェレランドと言います。そのことを楽譜で確認し、頭で「ああ、ここはアッチェレランドだから速くなっていくぞ」と理解することができます。でも、これだけではアッチェレランドを本当にわかったとは言えません。実際に歌ったり、楽器を演奏したり、聴いたりして、つまり心や体を使ってこそ、ワクワクした感じをより得られてアッチェレランドの本質を理解することができるのではないのでしょうか。もっと突っ込んでみましょう。例えばその曲に合わせて指揮をしてみます。だんだん速くなるに連れて、その速さに指揮がついていけなくなるほどになって、その速さは単に速さだけの問題ではなく、エネルギーの増大を意味するものなのだというところをも理解することができるはずです。それも無意識のうちに感じるすることができます。楽譜を見ているだけではわからない、感じられないことです。ここに「体を動かす」意味を見いだすことができます。

やはり、音楽の本質を理解するには体を動かすことが有効であり、それは心で感じることと軌を一にしているとも言えることなのです。

この論理は、音楽教育者のE.J=ダルクローズ博士の論とも一致するところです。ダルクローズ博士は、体の動きを音楽教育に取り入れた世界の第一人者です。今から100年も前のことです。彼の方法は、音楽のみならず、舞踏、演劇、ひいては心理療法などにも応用されました。

さて、私が河合先生の論を紹介するのには、まだ理由があります。小学校における音楽科、もしくはムーブメントを考える時に非常に参考になります。河合先生は、上の図を使

って、「子どもが発達するに連れて、上の世界と下の世界を仕切る線がどんどん下に下がってくる」と言います。つまり、年齢が上がるに連れて「頭で考える領域」が増えてくるのです。これは大坂先生の「からだまるごと論」と似ていると思います。幼少の頃は、いわば体で考える性質を強く有しているのです。体が優先されているのが幼少の頃。ところが、年齢が上がると頭で考えて理解することは、それが独立して行われているのです。

小学校教育で言えば、低学年は体をいっぱい使って動かすこと自体が好きですから、そのような授業が非常に有効に働きます。しかし高学年になると恥ずかしさも手伝ってなかなか体をめいっぱい動かすことは難しいかもしれません。図中の仕切り線が下がるのです。ですから、まず「頭で考えて理解」することを優先させ、それをきっかけに下の世界、つまり「心や体を動かす世界」に入れてやることも有効になります。しかし高学年であっても、あるいは私たち大人であっても本質的には体を動かすことが好きですから、何かのきっかけをつくってあげられれば、嬉々として動き、音楽をよりよく理解したりあるいは音楽の世界に没頭したり、ムーブメントが本来ねらうバランスのよい育ちをしたりすることが期待できるのです。

◆体を動かさないとムーブメントではないのか？

もちろん、これまで述べてきたことに鑑みれば、体を動かすことは非常に有効な指導法、教育法と言えます。しかし、河合先生の論でもわかるように「体の動き＝心の動き」ととらえることもできます。子どもが真の意味でやる気を出して活動に没頭する姿こそが、ムーブメントが求める姿です。必ずしも全身を動かす活動を取り入れなければならない、というものではないのです。特に学年が上がってくると「全身運動」を「全心運動」ととらえることも有効です。

3. 小学校音楽科におけるムーブメントの可能性

では、実際にはどのようなムーブメントの活動が小学校の音楽科の授業に位置づくのでしょうか。まずは、現行の学習指導要領を見てみましょう。

平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領の音楽科を読み進めると、「体の動き」に関する次のような記述があります。(第 4 章 2 内容の取り扱いと指導上の留意点)

(2) (各学年の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、)音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかがわかることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること。

これは、ムーブメントの活動がねらうこととかなりの部分一致していると言えます。そしてこの文言から、小学校音楽科におけるムーブメントの活動が見えてきます。

主に 2 つの側面があります。

- (1) 表現（歌唱、器楽、音楽づくり）の学習に「体の動き」を取り入れる。
- (2) 鑑賞の学習に「体の動き」を取り入れる。

では、例を挙げて説明しましょう。

(1) 表現の学習に「体の動き」を取り入れる。

① 1年生『きらきらぼし』

例えば、1年生で『きらきらぼし』を歌うとします。目標は、①階名で歌えるようになること、②ドレミ…の相関的な音の高さがわかること、③鍵盤楽器で『きらきらぼし』を弾けるようになること、です。

そのときに暗記させるように「ドドソソララソ…」と歌わせるだけよりも、例えば両手を前に出し、音の高低を手の動作（上下）をつけて歌わせませます。すると、見た目にもラはソよりもちょっと高い…ということ腕の筋肉感覚、そして同時に喉の筋肉感覚で覚えていきます。それも遊んでいるうちに覚えていくこととなります。子どもにしてみれば、遊んでいるうちに覚えちゃった！ということとなります。

今度は、音の高低に合わせて上下させていた腕を、左右に動かします。音が高くなるに連れて腕を右に動かし、逆に音が低くなるに連れて腕を左に動かします。実はその動きは、鍵盤を弾く際の指の動きと同じになっています。これも、遊んでいるうちにパッとできてしまいます。キーワードは「楽しさ」です。楽しみながら音楽を感じ、理解し、演奏できるようにしていくのです。覚えさせられるのではないのです。

② 6年生『ビリーブ』、3年『ふじ山』

同じことを違う学年でもやってみましょう。例えば『ビリーブ』。これに腕や手の動きをつけます。音が高くなると手を高く上げ、逆に低くなると手を下げていくのです。メロディラインを、手を上下させる動きで表現しながら歌うのです。こうやって歌うと、音の高さを確認できるばかりではなく、音の強弱にも気づくようになります。なぜか手を高く上げると強く歌いたくなると、子どもが言います。音の高低と強弱の相関について、子どもが感じている、気づいているのです。

体を動かすことで、子どもが音楽の何らかの要素に気づきやすくなることは、さまざまな場面で認められることです。音の高低と強弱の相関については、同じ方法で3年生の『ふじ山』でも言えます。体の動きが豊かな歌唱表現を生み出す例です。

(2) 鑑賞の学習に「体の動き」を取り入れる。

鑑賞とは、「聴く」活動のことです。ところが、その鑑賞の学習に「体の動き」を取り入れるのです。どういう授業でしょうか。

① 4年生『ハンガリー舞曲第5番』

対象は4年生。ブラームスの『ハンガリー舞曲第5番』を鑑賞します。この音楽は、速さが激しく変化する音楽です。速さの変化は聴くものを急き立てたり、なだめたりするようです。

これを単に「これから速さが変化する音楽を聴きますよ」と教示してから聴かせるという指導法もあるでしょう。でも、聴いた後「どうでしたか？」という発問をしても、子どもは「うん、確かに速さに変化があった」「速くなったり遅くなったりした」と答えるにとどまるでしょう。そこに、本当の意味で音楽の面白さを感じ取った様子は見受けられない

と思います。

ムーブメントでは、次のような授業を提案します。「2拍子の指揮をしながら、音楽を聴きましょう」と。すると、子どもたちは刻々と速さが変化する音楽に指揮を合わせようと必死になります。そのときの子どもの顔は、まさに嬉々としていることでしょう。ニコニコしています。時にはキャッキヤと笑い出すかもしれません。教師が発問します。「どうしてニコニコしているの？」と。すると子どもは「だって、速さが変わって面白いんだもん」とか「予測がつかないんだよ、この曲。速さが変わっちゃって…」と答えるでしょう。

お気づきのことと思います。体の動きを伴うことで、教師が聴き取らせ、感じ取らせたいと目論んでいた「速さの変化」について、どの子も気づくことができるのです。やはり体の動きが楽しさを生み、そしてさらに確かな音楽の学力をも保障することにつながるのです。

以上、体を動かすこと（ムーブメント）で音楽の何かを学ぶ事例をいくつかご紹介しました。これらは「動くムーブメント」と呼ばれています。教師がある程度動きを決め、子どもはそれに従って動く。その結果、楽しさを感じながら音楽の何かに気づき、学びにつながるのです。

②5年生『剣の舞』

タイプの違うムーブメントをご紹介します。あらかじめ鑑賞の授業で、『剣の舞』における音楽の特徴などについて学んでおきます。例えばこの音楽には「合いの手」が存在すること、ABAの三部形式であること、最後に五音音階があることなどです。

これらを聴き取ったあとで、グループで『剣の舞』を体の動きで表現するのです。いわゆる身体表現です。すると、子どもたちはグループで「合いの手はどうやって動く？」とか「ABAだからAとBの隊形を変えようよ」などと話し合い、ひとつの動き、パフォーマンスをつくっていきます。

どう動こうと、正解とか不正解があるわけではありません。でも、この活動は、グループの成員で意見を出し合い、合意を形成するコミュニケーションの力を育むには大変有効です。しかも、そこには音楽の確かな力が生きて働いています。学習指導要領にも「味わって聴く」という文言があります。このような活動を通して、子どもたちは音楽を味わって聴くことができるのだと言えます。まさに音楽と子どもが一体化する瞬間です。

この場合のムーブメントは、子どもの「創造性の育成」「コミュニケーション力」に大きく寄与しているのです。「つくるムーブメント」と呼ぶにふさわしい活動です。

(3)「ひらくムーブメント」の役割

以上、小学校音楽科におけるムーブメントの可能性について考えてきました。表現をより豊かにするため、音楽をよりよく理解するため、コミュニケーション力を育むためにムーブメントが有効であることを、例を挙げてご紹介しました。

ここでもう一つのタイプ、「ひらくムーブメント」の存在についてご紹介します。これは、ムーブメントの根幹に位置するものです。例えば、子どもが音楽を聴いて自然に体を動かすことがあります。居ても立ってもいられない、音楽に体が突き動かされている状態です。

誰かに指示されて動いているのではなく、能動的に体が動くのです。このような活動が、子どもの心や体を開放、または解放することは明らかです。そしてそのような状態の体ができ子どもは、何事にも積極的に取り組むことができ、多くの人と望ましいコミュニケーションを図ることができると考えられます。

小学校においても、この「ひらくムーブメント」がもっとも優先して行われるべきです。この際のキーワードは「遊び」です。例を挙げます。「おちゃらか」というわらべうた遊びがあります。2人組になって行います。教師が打楽器を鳴らすか、あるいはピアノなどで伴奏をします。だんだん速くしたり遅くしたり、強くしたり弱くしたり…、音楽に変化を与えます。子どもたちは、もの見事に即興的に音楽を体全体で表現します。友達と手合わせをして相手のあるがままを受け入れ、また自分の体を開放し相手に心や体を委ねます。同時に音楽が表現する要素を的確に即興表現するのです。これが「ひらくムーブメント」です。図2における「心や体で感じてわかる」世界の具現とも言えます。

もう一つ例を挙げます。ある曲を歌うとします。そのとき、子どもたちがきわめて自由に体を動かしながら歌うことがあります。これも「ひらくムーブメント」と言えます。そのような環境をどのように教師がつくり出すか、ということも指導法の一つとして研究されるべきだと考えられます。

4. まとめ

以上、小学校教育におけるムーブメントについて概観してきました。おおよそ次のようにまとめられそうです。

●ムーブメントとは？

- ・結果だけではなく、むしろその過程を大事にする教育。
- ・子どもの「頭で考える力」「心で感じる力」それを支える「体」をバランスよく育てる教育。
- ・心や体で感じて（動いて）わかることを重視した教育＝物事の本質をとらえる力を育む教育。
- ・以上のことを「音楽科」を切り口に行っている教育。
- ・音楽のよりよい理解、よりよい音楽表現を促す教育。
- ・「ひらくムーブメント」→「動くムーブメント」→「つくるムーブメント」と分類・整理できる。

私たちの研究は、まだ道半ばです。これからも、幼児教育、小学校教育、特別支援教育などにおけるムーブメントのあり方、音楽科におけるムーブメントのあり方を探っていきたいと考えています。是非ご一緒に子どものこと、音楽のことを話し合いませんか。